

## イネドロオウムシ

### 1 形態と生態

- (1)イネドロオウムシは、北海道から沖縄県まで日本各地に分布する甲虫の一種で、一般的には寒冷地や山間山沿いの害虫として知られています。しかし、埼玉県では、行田市、熊谷市以南の江戸川流域から荒川流域までの平坦部で発生が確認され、特に、1990年代から江戸川沿いで多発しています。
- (2)成虫は体長 4.5mm 内外で、体色は光沢のある藍色を呈しており、胸は茶褐色です(写真 1)。
- (3)幼虫の体色は黄白色で頭部が黒色ですが、常に自分の糞を背負っているので、外見上は灰褐色に見えます(写真 3)。糞が泥のように見えるので、「イネドロオウムシ」の名称があります。幼虫はイネの葉上に白色の繭をつくり蛹化します(写真 4)。
- (4)農薬登録で用いられる害虫名はイネドロオウムシですが、「イネクビボソハムシ」とも呼ばれます。



写真 1 成虫



写真 2 イネの葉に産卵

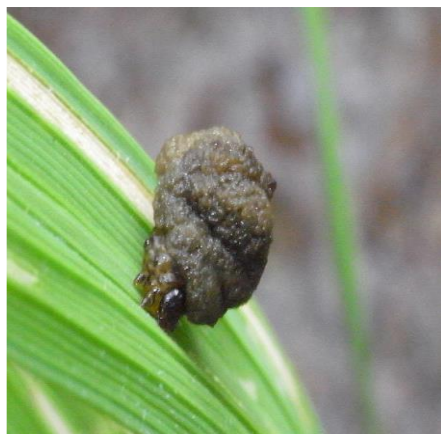


写真 3 糞を背負う幼虫



写真 4 イネの葉に形成された繭



写真 5 幼虫と食害痕



写真 6 被害株

## 2 被害の様子

- (1)成虫は葉に細い筋状、幼虫はやや幅広の筋状の食害痕を残し、白変葉となります(写真 5、6)。
- (2)多発すると水田全体が白く見えます。
- (3)収量に直結する茎や籾を加害しませんので、収量への影響は比較的少ないです。
- (4)若齢期の食害は小さなかすり状で、フタオビコヤガやシロマダラコヤガ(別名:シマメイレイ)の若齢期の食害痕と類似しています。

## 3 発生について

### (1)発生条件

5月下旬～6月に曇雨天が継続する年は多発し、晴天が継続する年は発生が少なくなります。また、窒素施用量が多く、葉色が濃いイネは多発する傾向があります。

### (2)発生消長

年に1回、春～夏に発生します。成虫で越冬し、5月上旬からイネに飛来して葉を食害しながら産卵します。幼虫は5月下旬～7月上旬、繭は6月中旬～7月上旬、新成虫は6月下旬～7月に見られます。その後、周囲の枯れ草の茎の中などに潜り休眠に入ります。

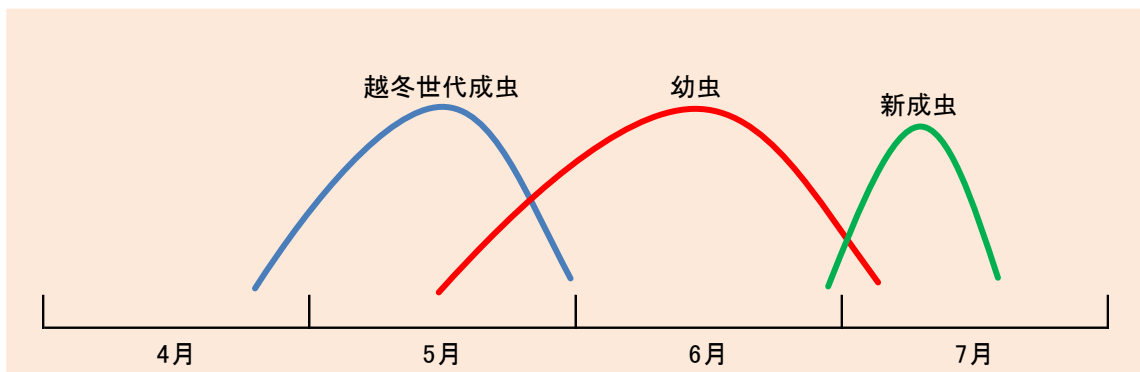


図1 イネドロオウムシの発生消長

## 4 防除時期と防除方法

### (1)耕種的防除

窒素の多施用を行わないこと。葉色が濃い地力窒素の多いほ場では、窒素施用を少なくすることで発生を抑制できます。また、移植時期を越冬成虫の発生時期以降に遅らせることで発生を抑制できます。

### (2)薬剤防除

県内のイネでは、食害が生育初期の葉身であるため、収量への影響は比較的少ない状況です。若齢幼虫発生時期の被害株率30～50%以上が防除の目安です。

#### 薬剤防除を実施する場合は、

- 最終有効年月内の農薬を使用し、ラベルに記載されている適用作物、使用時期、使用方法等を必ず確認してください。
- 適切な薬剤を選択し、病害虫が抵抗性を獲得しないように、同一系統薬剤の連続使用を避けてください。
- 農薬を散布する際は飛散しないよう対策を講じてください。

- 発行 平成28年2月 埼玉県農産物安全課、一般社団法人埼玉県植物防疫協会
- 問合せ先(原稿執筆)  
埼玉県病害虫防除所 TEL048-539-0661  
埼玉県農業技術研究センター生産環境・安全管理研究担当 TEL048-536-0409